Music in Museum

Fuji-tv ART NET
バックナンバー▶

クラシック音楽はコンサートホールでのみ奏でられるものではありません。周りを名画で囲まれた空間を持つ内外の美術館もさまざまな形でクラシック・コンサートを開いています。所蔵美術品とともに、それら自主的に開いている興味深いコンサートをお教えします。

相田みつを美術館「ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン」

見聞きする人：渡辺 和

東京国際フォーラムの北のはずれ、地下に埋め込まれた相田みつを美術館。

美術館の向こうでは「熱狂の日々」が始まっている。

空虚な巨大空間の片隅に

関西方面からの新幹線が東京駅ホームに滑り込む直前、JR線路の湾曲に合わせカーブを描くガラス張りの超巨大サヤエンドウが左手に見える。まだ東京西域がフロンティアだった20世紀の終わり頃、有楽町から新宿へと移転していった東京都庁の跡地に建った、建築家ラファエル・ヴィニオリの設計になる巨大空間、東京国際フォーラムだ。東京都が株を所有する民間会社が運営するレンタルスペースである。

正直言って、東京東部地区で税金を払っている一都民とすれば、この国際フォーラムという空間、どうにも納得のいかないものであった。都庁を西に移すのは結構でしょう。跡地を遊ばせておくわけにもいかぬ。でも、どうしていまさら御上が東京駅の脇にコンヴェンションセンターなのか。お台場はどうなった。生き残りに必死の幕張や横浜との競争に勝てるのか。都営なら民間よりも廉価にできそうなレンタル会議場は大人気だろうけど、専門ホールが流行の昨今、多目的ホールを4つ5つ並べてどうしろというのか。ガラス棟と呼ばれるあの豪奢なサヤエンドウなんぞ、夏には冷房代だって膨大な額になろうに。都市環境にも良いわけないし。

誰がどう見ても「典型的な税金の無駄遣い」にしか思えぬ巨大施設、案の定、設備維持だけで青息吐息。都の財団の赤字をいつまでも都民税で補填するわけにも行かず、2003年にとうとう都が51パーセントを出資する民間企業となった。

敢えて肯定的に評価すれば、このだだっ広いバブルの末裔は、歴史や意味のある建物に埋め尽くされたお堀端から有楽町、銀座、丸の内界隈にほぼ唯一の、あらゆる意味付けから自由な空間なのだ。ひとつのイベントが終わったらまた別の顔になる都市の広場。普通の都市ならばフリース

巨大なガラスのサヤエンドウの下にぶら下がった楽聖ベートーヴェンのご尊顔。

国際フォーラムの地上区画では、チケット販売で大混乱。

開場を待って美術館前に列を成す人々。

ペースになるはずの皇居前広場が厳重に管理されている帝都だ。都庁跡地を敢えて虚無な空間にするという発想そのものは間違っていないのだけど。

ま、東京論としてフォーラムを論じ始めればキリがないのでこれくらい。そんな虚無空間に、ひとつだけ意味付けがハッキリした空間がある。フォーラムの丸の内寄り、東京駅京葉線ホーム地下コンコースまでもう一歩のところに埋め込まれた、相田みつを美術館がそれ。

レンタルスペースの地下の隅に、常設の美術館が置かれる。それも、タブロー画や彫刻、写真などを展示する通常の意味でのアートミュージアムとはちょっと違う。戦中戦後日本を生き、21世紀を待たず没した孤高の書家、相田みつをの書ばかりを並べた、猛烈に主義主張の強い美術館なのだ。

相田みつをについては語るまでもなかろう。詳細は公式ホームページ
http://www.mitsuo.co.jp/museum/index.htmlをご覧あれ。没して数年後に数寄屋橋交差点前のビル上層階に開かれた常設作品展示場は、国際フォーラム民営化後、ほど近いガラス棟地下1階に移転。年間来場者は50万人を越えるという。あの上野の森の東京国立博物館で年間入場者数が100万人程度なのだから、わずか700坪の敷地を思えば驚異的。土地効率の良さでは日本屈指のミュージアムじゃないかしら。

相田一人（かずと）館長曰く、「フォーラムというのは大変立派な建物なんですけど、ガラスと鉄です。私たちの美術館は、フォーラムの中で一番心和む空間にしようと考えたんですよ。そのひとつの現れが土です。ここには土を踏める箇所が一カ所もないので、美術館の中に土を敷いたんですね。人間の足というのはデリケートでして、目をつぶっていても、カーペットの上か、コンクリートの上か、土の上を歩いているか、瞬間的に分かります。ここに入ったとたん、皆さん、足下から緊張が弛むと思うんです」
絵となった言葉が裸で並ぶ、直接的で過剰なまでの意味空間に、具体的質感を与える土。ひたすら広大な虚無の空間の底で、ひとりの書家が叫んでいる。これも東京。

「熱狂の日々」に巻き込まれ

民営化後、（株）東京国際フォーラムも、己の空間の価値を高める努力が必要と思った。スペースレンタルを本業とする会社が、有する空間を存分に利用した祭を主催すると発表したのである。とはいえ、部屋貸し屋さんはイベント屋ではない。フランス人ルネ・マルタン氏を起用、銀座

若きフランスのピアニストたちが、分解して持ち込まれたピアノで豊かな響きを奏でる。

ベートーヴェン時代の笛について説明するフルート奏者ユーゴ・レイヌ。

相田みつをの書の前で、フィリップ・ピエルロらがベートーヴェンのマンドリン合奏曲を披露。

の大手音楽事務所と組み、この辣腕音楽プロデューサーがフランスやスペイン、ポルトガルで都市再生プロジェクトとして成功させた音楽祭の有楽町版を制作することになったのである。

ヨーロッパでマルタン氏が演出した音楽祭は、開催地自治体が全面協力し、街のあちこちを会場に、短い時間のライブ・クラシックコンサートを同時多発的に行うもの。プロデューサーが「ラ・フォル・ジュルネ（熱狂の日々）」と称するこんなフォーマットを、開催場所を都市から閉じられた人工空間に、主催者を地方自治体から民間貸しスペース会社に移植。国際フォーラムに並ぶ5000席から200席まで多彩なホール5つ、それにオープンスペースなどを同時に用い、膨大な数の有料演奏会や無料イベントを一気に開催、「期間限定都市型クラシック音楽テーマパーク」とする目論みだ。時期は2005年ゴールデンウィーク前半の3日間、オフィス街からビジネスマンが消える時である。

なにせ自前の空間はタップリある。同時に区画内外で関連事業も行えば、商業イベントじゃなく地域イベントのように見せることだって可能だ。主催側の表現をそのまま使えば、「世界各国から1000人以上の音楽家が集い、朝から終電間際までベートーヴェンを奏で続ける、熱狂の3日間。◎朝から晩まで3日間150公演 ◎出演アーティスト約1000人 ◎料金破格の1500円程度」　なんだか量販店開店セールのチラシみたいだけど、構造的にコスト高なクラシック音楽という商品を十万単位で薄利多売しようというのだ。こんなやり方もありでしょう。

というわけで、連日朝の7時前から東京国際フォーラムまで通ったのでありました。どうなることやら危惧されたこのイベント、蓋を開ければのべ来場者数は30万人を超え、クラシック音楽業界始まって以来の大ヒット。正直、3日間通い詰め、当日券販売の大混乱にもしっかり巻き込まれた者とすれば、この数字には実感が沸かないけど、まあ数字は数字。本来は何の意志も持たない巨大空間が、場として意味を持とうと頑張った日々の記録として、謹んで承っておきましょう。

そんな熱狂を、常設テナントの相田みつを美術館も静観してはいられない。「フォーラムさんから、この音楽祭で何公演か、室内楽やピアノ演奏で使えないか、というお話がありました。音響は心配だけども、それでかまわなければ、ということで」（相田館長）　とはいえ、ビジネス街

チェロのルロイはベートーヴェンの傑作チェロソナタを演奏する。

は閑古鳥が鳴こうが、美術館とすれば多数の来館者を迎えるゴールデンウィークだ。昼間から演奏会場に、という提案もあったそうだが、なにせ遮音性がない空間、書の鑑賞に支障があっては困る。昼間は持ち込まれたピアノやチェンバロの周囲を囲い、閉館後に慌てて演奏会場を設えることとなった。かくて、大家さん主導のベートーヴェン祭の熱狂が晩に向け頂点に及ぶ頃、相田みつを美術館も押っ取り刀で「Music in Museum」に参入することと相成った次第。

ベートーヴェンで空間の湯揉み

JR京葉線東京駅ホーム口を挟み、相田みつを美術館は左右ふたつの展示場に別れている。向かって右手の第1展示室前に人が列を作り出すのは、夕方6時前。チケットをもぎられ、足下にフォーラムの他の空間との感触の違いを感じ、底に「夢」と大書きされた井戸を覗いて奥の第5展示室に向かうと、みつをの書に囲まれた空間に、ちょっと小ぶりのコンサートグランドピアノが置かれている。「ピアノは分解して入れまして。この美術館には搬入口はないので、入らなかったんですよ。お客様が、あれっ、どっから入れたんだろうな、って顔をなさっていた（笑）」（相田館長）

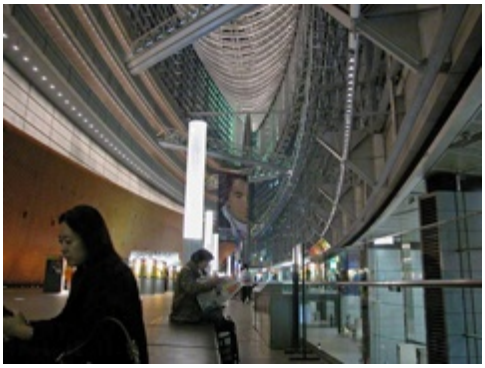
それぞれが約1時間のコンサートでフランスの若手ピアニストたちが披露したのは、ベートーヴェンのソナタだけではない。クレメンティ、クレーマー、フンメル、それにピアノ練習曲でご存じチェルニーなど、ベートーヴェンの弟子や同時代マイナー作曲家ばかり。相田館長もちょっとマニアックで心配したという品揃えながら、5000席の大ホールとはまるで違うわずか100席少しの空間は、幸いにも3日間12公演すべて満杯となった。

「作品に囲まれた中で音楽を聴くことは、ありそうでなさそうですし、非常に良いことだと思います。音楽を聴く緊張感。それに、ちょっと後ろをみればそこに作品が飾ってありますから、作品からある種の緊張感を受ける。それを和みと感じる方もいらっしゃるかもしれませんね。独特な空間にはなっていました」（相田館長）

とりわけこの空間と馴染んだのは、マンドリンとフルート、チェンバロの響きだろう。普段ならサラリーマンがJRや地下鉄へと急ぐ深夜10時15分に開演。「運命」や第９交響曲で疲れた夜のフォーラムの片隅、相田みつをの書に囲まれた空間に集まった一握りの人たちが、若きベートー

ヴェンが貴族や友人のために書いた繊細な響きに耳を傾ける。当時の笛の説明など交えつつ、優しく響く音たち。楽聖がこんなフレンドリーな姿を見せてくれるなんて、なかなかありません。

「空間というのは、湯揉みをしないと良くならないと考えています。お客様が歩いてくれて、いろんな思いで作品を見てくれる。そこで良いコンサートがあれば、空間も揉まれますし」（相田館長）　マンドリンの音が意味の濃厚な空間を揉みほぐし、虚空に消えれば、もう夜も11時過ぎ。ミュージアムを出て見上げるサヤエンドウの下は、10万人を動員した昼間の喧噪はどこへ、いつもの寂しさ。空間が広ければ広いほど、寂しさも深まる。だって、「にんげんだもの」。



深夜の国際フォーラムは、いつもの夜の寂しさにベートーヴェンの顔が揺れる。

東京国際フォーラム内「相田みつを美術館」での音楽を含む各種イベントは、公式ホームページ
http://www.mitsuo.co.jp/museum/index.html
をチェックされたし。
なお、次回の「ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン」は、2006年のゴールデンウィーク後半に開催予定。
公式ページhttp://www.t-i-forum.co.jp/lfj/#

写真提供：東京国際フォーラム

◀TOP

NO COPY フジテレビホームページに掲載されている写真はすべて著作権管理ソフトで保護され、掲載期限を過ぎたものについては削除されます。無断で転載、加工などを行うと、著作権に基づく処罰の対象になる場合もあります。
『フジテレビホームページをご利用される方へ』のページもお読み下さい。

Copyright © 2006 Fuji Television Network, Inc. All rights reserved.